

3

本という存在の本真的目的について



Speaker Profile

つちや しゅん

土屋 俊 Syun Tutiya

千葉大学 文学部行動科学科 教授

1975年 東京大学教養学部卒業
1980年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学
1982年 千葉大学助教授(文学部)
1994年 千葉大学教授(文学部)
1998年 千葉大学附属図書館長(2002年3月迄)
2001年 文部科学省文化審議会著作権分科会専門委員(2003年3月迄)
2001年 文部科学省科学技術・学術審議会専門委員
2002年 国立大学図書館協議会会長補佐
2003年 文部科学省独立行政法人評価委員会臨時委員(科学技術振興機会部会)
2003年 日本学術会議情報学研究連絡委員会委員
2003年 国立国会図書館科学技術関係資料整備審議会委員
2003年 国立情報学研究所客員教授
2004年 千葉大学国際教育開発センター長

Abstract

📄 エンタテインメントとしての「本」をとりあえず別にすれば、本という存在は、社会が知識を共有するための手段の一つであったということが議論の出発点となるべきであろう。この出発点にまで戻る必要がある理由は、電子計算機というよりはインターネットの登場によって、社会の知識共有について考える枠組みが全面的に変化したということである。20世紀においては放送という手段が付加されたものの、紙にインクで印刷され製本された近代の本という媒体に依存した知識共有は、インターネットといういわば不可視の媒体によって、つまり、ほとんど媒体の存在を意識させることなしに実現することが可能となったのである。社会が知識を共有することなしに存続不可能であることは自明であるが、それが本あるいは印刷物という媒体に依存していたことによってどのような可能性と制約をもっていたかということはまだ明らかになっていない。この講演の第一の目的は、この点を明らかにすることであり、タイトルもその趣旨を表現している。とくにその際、本による媒介が、本の製作・流通という「もの」的側面によって知識の共有を促進するとともに抑制していたかもしれないということは重要である。

したがって当然、第二の目的は、インターネットによる知識共有の様態が、本によるその様態をどのように変化させ、あるいは置き換えるかということである。本が存在そのものが抑制していた側面をインターネットの登場が排除するものであるならば、話は簡単であるが、この部分を検討するためにどのようなことを考慮すべきであるかについて、残念ながら結論には至らない議論を示すことにとどめる。